池の聲

泉鏡花作

全一章

「……（かた／＼かた、かた／＼かた、）あゝ、久しいもんだが、生れついたしやうがにや、（兩方）とも鳴けめえス。（かた／＼かた）ト遣つた處は、何の事はねえ、居候が戸を開ける音だぜ。」

ト斜に構へて、咽喉をぶく／＼、で目玉をきよろりとして居る。

「鮑が三ツとも聞えますかね。」

と、すらりとしたのが、口をぱくり、これで莞爾した思入なり。

「誰だ、や、緋鯉か。恁う、久濶だね。だが、何だぜ、緋鯉を緋鯉と呼ぶに不思議はねえが、水も濁ると色氣がねえ、此處は緋鯉ちやん、と行く處だ、何うだね、おいらん。」

「まあ、可厭だ。」

と鰭でひら／＼と嬌態をする。

「何でも店つきはお前に限る。それ、藤の花の暖簾を分けて、其の裲襠がひらりと見えると、立所に、ボンとお手が鳴らうと云ふもんだ。まあ、づツと寄んねえ。」

「あいよ。」

「扨と……先づ以てお美しい。」

「おや、蛙鳴さん、難有うよ。」「はてな、何か耳觸りな事を云ふぜ。」

「だつて、お定りの表徳ぢやないか。ねえ、おまへ、おや、矢張りあめいと聞えるさうだよ。」

「蛙鳴もんだと言はねえばかりよ、畜生め。恁う然う言や、何だ、あれは？　俺が三つなら三ひよこひよこで、それ、古の歌にもあるが、鮑が三つとは聞かねえ句だ。」

「（かた／／かた）さね、磯の鮑が三つのやうに聞えるからさ。」

と又すらりと泳ぐ。

「はあ、強藥の三個弾、ボン／／ボンと來る奴か、ふん、いや、我ながら應へるわえ。」

「氣が利かないぢやないか。同じお長屋の兄さんだ。不景氣な鼻唄なんかそゝつて居ないで、時節柄

だよ、假宅とでもお鳴きなさいなね。」

「成程、（かりたく、かりたく）か。待ちねえ。俺のやうな曾我中村が、（かりたく）と、それ遣つた日にや、質屋の番公を口説くやうだぜ。納まらねえ。が、（全く、借りたく借りたし）だ。」

「眞個だわねえ、昨日今日の事でもないが、お互に酷い目に逢つたぢやないかね。」

「姿婆轉倒と云ふ御難ス、辛くして生命助かりと云ふ中にも、ゑごくつて煙いんだ。ぐわツとポンプで掻廻されて、然らぬだにの水道尻が、一面泥水と成つた時は、世界の掻玉子と云ふ料理鹽梅。いや、さすがの此の方、目も口も開くもんぢやねえ。五體渾沌として海鼠の如し。車前草の下に、ト片息に成つて、ぶら／＼と風に煽られた處は、六月目に墮胎された賽の河原と云ふ形よ。密とでも天上を見ようもんなら、凡そ、俺くらゐな火の粉な、ーー　えゝ、緋鯉ちやん、お前ほどあらうと云ふ、炎が交つて、めら／＼、ばら／＼と引被る。」

「よしておくれ、聞いても半襟が震へるわね。」

と鰭を細かに、ぶる／＼／＼／＼。

「羹に懲りて鱠を吹くだ。緋鯉ちやん、お前の前で言つちや惡いが、當座は最う、ちらりと見ると、ぎよつとした。赤い手柄も、緋縮緬も、色氣處の沙汰ぢやねえ。」

「眞個にね、賀の祝のお婆さん以來、一時は私だつて、此のさ、上被が脱ぎたかつたよ。」

「へん、うまく云ふぜ。頼むよ、おいらん。お前に然うした實があらば、蛙鳴さん、恁うした鳴音は出さぬだ。先づ可さ、假宅もづらりと並んで、四つ目垣の青々／＼とした處へ、すつきりと植込の茂を見せて、ちら／＼石燈籠の點いた處は、二三十年以來さ。追付け恁う、簾の蔭に、薄い裲襠でも透いて見ろ、豚だつて羊に成らあ。些とは女も見直すぜ。俺が夥間の枝蛙ぢやねえが、ひよいと櫺子窓に突出した柳の枝へでも上つて見てえ、こゝで濡の幕の雨を呼ぶだ。だが最う當分、紅い裲襠はあやまるな、氣がさして何うも成らねえ。恁う氣にしなさんなよ、お前は燃え立つやうだとつて、水の中に居るんだから、

其處は安心だが、あの前兆せの媼様は何うだ、今思つても物凄いぜ……なあ。」

「何だつて、又、眞赤な服装をさせたんだらうね。」

「其處は人間のお儀式だ。何も、何うの恁うのつて、理屈はねえ。其が自然の約束事だ。誰が惡いと云ふのぢやねえ。些と前の、あの日本橋の渡り初めをした媼様を見ねえ。矢張赤い頭巾だつたが、此の方は、それ、どしや降りと來たから火の元は靜まつた。廓の媼様が時は、からつとした天氣の處へ、櫻の植ゑたてと云ふのに、可恐い南風ぢやねえか。其の中をお前、頭巾から、足袋、衣服に帶よ、羽織まで、いづれも裁下しと來て、めら／＼、躑躅に火熨斗を當てたやうな、何の事はない縫ぐるみの、火焔の精靈。此がお前、頭巾の下から晃々光る、白髪をすら／＼、太杖で、何と、五丁町をぐるぐる廻つて、仲の町から、ばつと大門口、五十間に、ひよいと顔を出したンだから凄からうぢやねえか。」

「然うだつたつてねえ。私は最う、皆があれ／＼

緋婆々が駈廻るつて泡沫をお立てだから、最う可恐くつてさ。吉野町の寮に居る、いけずな、そらね、可愛らしい、あの何時も公園の柵を一本根こぎに透して置いて、お轉婆に跳込む娘兒だあね。お馴染が來て、手を叩いて呼んでおくれの處だつたけれど、其れ處ぢやないんだもの。藻を被いで、突伏して、わな／＼震へて居たんだがね。駆けたつてね。・・・・賀の祝と云へばお前さん、八十だらう、そりや祝をするくらゐ、達者なお婆さんぢやあらうけれど、何だつて、又やけに・・・・・」

「おつと！　禁句だ、氣障を云ふめえ。」

「まあさ、何だつて年寄りが駆けたんだらう。おまけにお前さん、消防夫が火事装束で、鐵棒をついて、大勢警固についたんだもの。其も前兆だと云ふけれど、其の時は、伊達のお練さ、行列ぢやないか。お先駆揃へて花やかにいツ、・・・・チヤアンチヤ、チヤンチヤン、チアンチヤチヤンチヤンと行く處を、駆出しちや約束が違ふだらうにさ。」

「其處が、矢張り約束だと云ふ事よ。總體、今度

の道中は、第一何よ、御當人のお婆さんが、何、（御時節柄、然うでもあるまいよのう）で、氣が進まねえ。處を、傍のものが合點しねえで、やい／＼と囃し立てゝ、緋羅紗、緋天鵝絨で、赤い端緒の雪蹈まで穿かせたわ。南無阿彌陀佛と、それ五文字に推出して、江戸町、京町、揚屋町と、二軒、三軒づゝ、身寄、親類、懇意な茶屋小屋へ、一軒一軒顔出しをさしたらう。廓内ばかりだつて、曲り廻り可成りの道、其處は年寄だ、氣が短けえ、根が進まねえ處へ持つて來て、やい／＼云ふ、わあ／＼騒ぐ。二階三階、途中すがら、居續けの下の部が交つて一杯の見物だ。何が、お前、水道尻の方へ來た時なんざ、檢査場から病人が、一齊に顔を出すぢやねえか。あらう事か、物干は申すに及ばず、何を間違へたか、大屋根へ出て見て居たのがあら、可恐い。今にして思へばス、それ火事だ、と燒出した時と同じ様子よ。火のやうな南風は吹く、日はかん／＼當る、朝から出だして丁ど燒出したアノ午の刻、正午だ。陽氣と人だかりにくわつと逆上せて、婆さん、汗みづくに目が据つた！　あゝ、腰もしやつきり張る、氣が引釣る、早く顔出しの挨拶を濟まさうと、それ、杖を

鳴らして、すた／＼駆はじめたと思ひさねえ。」

「あゝねえ。」

「處がさ、此が何だよ、……何も、其の賀の祝の隠居どのが一切自分の料簡で、何を何うしたと云ふんぢやねえ、……緋鯉ちやん。」

と一つかた／＼かた、と鳴いて、ぐつと氣を沈める。

「何うしたのさ、一寸？」

ぱくりと、此も内證口。

「何うしたつて、お前、高い聲ぢや言へねえが、昔から廓を狙つて、フイと出て來る婆あ様！」

「まあ、どんなさ。」

「どんなつて、俺たちにや形は見えねえ。が、何だとよ、馬が緋の法衣を着た形で、小さなものだとよ。烏の翼を船にして飛ぶんだつてな。賀の祝の隠居さまは、たゞ衣服の色で云ふんだが、此こそ眞個の火婆々と云ふ……一人ぢやねえ、諸國方々に大分居る。が、今度來たのは淺間ケ嶽の岩蔭から灰を捲いて來た魔ものだ。其がね、此の要害で狙つて居て、

それ、時が來た、と飜然、賀の祝ひの身體へ乘移つて、燒くぞ、燒くぞ、（かた／＼かた。かた／＼かた）・・・・・」

と話が急込むと、つい本音で鳴いて、

「生命は助ける、と可恐しや、駆廻つた。」

「何かい、まあ、其の婆さんは、可厭だねえ。何處で狙つて居たんだねえ。お前さん、矢張り火事の火元の家かね。」

「うんや、大音寺前のな、當時はなくなつたやうだが、あの、石橋の近所よ、大鳥様の直き傍だ。すつかり家並は變つたが、唯た一軒、昔から軒の崩れた、廂の裂けた、そしてお前、潛戸の柱から破壁へ、引搦んで、一面に枸杞の生えた家があらあ。燒殘つたぜ、彼處い等。其の枸杞の葉に宿を取つて、枸杞の實が好きな婆さんでな、ポツ／＼食べながら逗留をして居たものよ。可恐しい。魔物の業で駆出させるんだもの、賀の祝の隱居どの、大門から、めらり五十間へ出た時は身體が二三尺空天へ飛上つた。何と、當人が走るんだから、警固についた消防夫徒が、のし／＼練つちや居られめえ、ぞろ／＼續いた見物

ぐるみ、さつさと急足に成つたと思へ、それ、あの音だ。」

「私はもう、雷様より可恐かつた。」

と鰭をすぼめる。

「なあ、凄かつたぜ。早調子が追詰つて、鐘で叩く責太鼓だ。チヤンカン、チヤンカン、チヤンカン、チヤンカン、チヤンカン。（かた／／かた）」

と鳴く。

「あゝ、悚然とした所為か、ひつそりしたよ。ねえ、お前さん、今のお前さんの聲は一寸色氣があつたよ。ね、燒出された仲の町の藝者衆が、當分、吉野町、千束町、橋場邊の裏長屋に手鍋提げたり水仕事さ、前垂がけの夕化粧で、土手を檢番へ通つて、假宅で、音〆を聞かせて、歸りにや火の車に乘るでもない、と微醉の夜道さね。……御近所が堅氣だからつて、氣を兼ねて、そつと格子戸を……ねえ。」

「うむ、（かた／／かた）か、（かた／／かた）、いや、此奴は可い。（かた／／かた）、と、おゝ、

星も曇つた。巽に恁う、粋な世界に成りかけたぜ。（かた／＼かた）か、假宅次手だ、一層八朔にや臙脂なし鐵漿つけた半元服、テテンテン、はや八朔の白無垢や、雪白妙……と遣つてくれ。」

「お待ちよう、櫻を植ゑて焼けたもの、又お前雪白妙で、水が出ちや大變だあね。」

「其處は此の方お構ひなし、酒亞たるもんだス。」

「まあね。譬にさへ云つたつけ。」

「へん、おつしやる。……お前だつて夕立にや面を出して洗はせらあ。眞個だ、……些と氣を換へて、えゝ、おい、久しぶりで、（かた／＼かた）、青田見なましでも聞かしてくんねえ。此方あ本調子で聞かせるぜ。（かた／＼かた、來たこらさ、かた／＼かた、くらら、くらら、くららら、くつくつ、くららら）。ホイひとりでに浮いて來ら。（くらら、くツ、くららら。）此奴、（苦は樂のたね。）とでも聞えやしねえか、何うだ、緋鯉おいらん、おい、おい、姉。」

と云つても返事がなし、きよろりと見ると……道理こそ暗の夜の池のふちへ、岸駒の虎と云ふ形で、

焼出されの猫が一匹。火に怯えたゝめ血迷うて、飼主が泣いて騒ぐのも耳に入らず・・・晝間は潜んで、今時分に成ると漁りに出る。骨と皮ばかりに痩せて、血の筋張つた目ばかり、ぎら／／と光る。夏産の、豫ていかもの食が、此の場合、で飛んだ物凄き代ものなれば、

「あつ、」

と云つて目をばち／／、ぶる／／と震へながら、

「（かた／／かた）・・・・・・」

ト小さな聲で、

「酒落ぢやねえ。へん、違えねえ。」

【完】